実践報告

保育者養成校における講義および実習での記録にみる一考察

― 日本児童教育専門学校での「保育実習指導Ⅰｂ」における実習日誌指導の実践報告 ―

水　引　貴　子

昭和学院短期大学

One of Consideration about Records of Lectures and Practical Training at Welfare Facilities

― Practical report on diary guidance in “Practical Training at Welfare Facilities” at a nihonjidokyoiku vocational college ―

Mizuhiki Takako

Showagakuin Junior College

抄録：保育士養成校の保育実習Ⅰ（施設）においても日誌の記述は重要事項でありながら、学生が負担に感じている事柄でもある。それにもかかわらず、施設実習指導では日誌の記述法を具体的に指導する時間や方法が十分でない状況も事実である。そのような状況を少しでも改善できるよう、日本児童教育専門学校の2021年度「保育実習指導Ⅰｂ」で筆者も含めた３名の教員によって行われたノートの作成を活用した指導法を振り返り、新たにノートの採点ルーブリックを提案した。このルーブリックは、日誌記述で求められる「誤字脱字をしない」といった基礎的な文章力や、エピソードの記述とそれに対する考察などにおいて、両者に共通している点が複数認められる。よって、「保育実習指導Ⅰｂ」でのノート作成の指導法の取り組みが、日誌を書く上で必要な観点と共通点があることから、理にかなっていると言える。

キーワード：施設実習、実習日誌、記録の記述、授業ノート、ルーブリック

１．はじめに

本レポートでは、2021年度後期に実施した「保育実習指導Ⅰｂ」（以下、施設実習指導）において、実習日誌の記述トレーニングに授業ノート作成を活用した指導法の実践と、指導を効率よく行えるためのノート採点ルーブリックの考案について報告する。

施設実習指導は施設実習が充実したものになるために、実習の意義や基本的な流れを理解し、準備を入念に行うことが望まれる。ところが、そのために様々な課題抱えている。保育者養成校の実習指導教員はそれらをできるだけ解決し、学生により深い学びを得られるよう指導することが求められている。その一つに日誌の記述があげられる。

施設実習を終えた学生に苦労したことを調査した研究によれば、「利用者や子どもとの関係」の次に「日誌の記録」に困ったという回答が多くあるいう。具体的には、観察したものをうまく文章に表現できない、どのような内容をかけばよいか分からないなどの回答がある（小倉・土谷、2009）。

また、学生が直面する日誌における困難さや負担感に限定した研究では、保育者や子どもの観察・分析・考察、専門用語や基本的な文章表現、日誌を書くことに関わる心理的負担、と三つに分類している。さらに、初めての保育実習の場合、「メモする時間がない」「正しい書き言葉や漢字・文法などの文章表現」「書く時間が足りない」などの物理的、表層的なレベルでの困難や負担があることを指摘した。（清道、2014）

一方で、実習先の職員に実施した、施設保育士に求める能力のアンケート調査によると、「子どもを観察する力」や「記録する力」が上位にあることが分かる（赤瀬川・友川、2015）。このように、施設実習においても保育所実習同様に、日誌を作成する能力は学生が苦手としながらも、実習先からは強く求められていることが分かる。

加えて、日誌を作成する能力の育成は養成校で行われるべきという調査結果もある（稲田、2021）ことから、実習指導の授業内で実習日誌のトレーニングは重要度の高い事項となっている。先行研究によれば、実習先から日誌の記述で多く指摘されるのは学生の誤字脱字である（久松・佐々木、2014）。養成校も実習で現場の職員による指導に対して期待しているのは、誤字脱字の指摘ではなく記述内容の深め方であるため、養成校の授業内で誤字脱字をいかに減らして実習に送り出せるのか、現在も様々な方法で試行錯誤が繰り返されている（大塚・市東・多田、2022）。

施設実習における日誌の記述に関する23本の論文を概観した稲田の研究（稲田、2021）によれば、実習指導における日誌の指導の実践を紹介している論文は３本である。施設実習日誌の記録指導法に限定した研究は多くはないが、学生が自らの実習を振り返るためにも、養成校の教員が実習の様子をうかがい知るためにも、施設職員が記述する力を求めていることからも、記録の指導法を模索し実践することには意義がある。

２．施設実習指導の抱える問題

上記の問題意識があるにもかかわらず、日誌の記述法を十分に指導できる授業時間数が確保できないことも問題である。保育士養成校の学生の実際は、保育実習Ⅰ（施設）（以下、施設実習）において、保育実習Ⅰ（保育所）（以下、保育所実習）とは異なる困難さを抱えている。例えば、実習先である児童福祉施設そのものの認知や種別の違い、社会的養護を必要とする子どもや障害児者への理解などである。実習内容も種別ごとに異なることから、学生にそれらを丁寧に説明し、理解を促す必要がある。よって、施設実習指導の授業の大半がこのような内容に費やしてしまう現状において、実習日誌の記録方法の指導まで手が回らない問題がある。保育所実習が先にある場合は、施設実習での日誌の記録法は保育所実習に倣うという指導をする養成校も少なくない。

また、施設実習の教科書においても、日誌について書かれた紙幅は数ページと非常に限られている一方で、各施設の概要と実習プログラムについては数十ページにわたって丁寧に扱われている（河合ら2020、駒井2018、和田上ら2020）。

このような状況ではあるが、幸いにも筆者が施設実習指導を担当していた日本児童教育専門学校では、東郷結香先生が「教科目相関表」を作成して効率の良い学びを目指し、実習と教科目の位置づけを整理し連携を図る仕組みを構築し、実施している（東郷、2019）。よって、心理・福祉分野の科目において、学生が実習の準備段階で学ばねばならない項目を偏りなく学べるように改善されている。日誌の具体的な指導は施設実習指導で行われている。

３．実践の具体的内容①授業の概要

筆者は2020年度および2021年度に施設実習の送り出し教員として、「保育実習指導Ⅰｂ」を担当していた。施設実習の教員は３名おり、各２クラス担当していた。2021年度の全15回の授業スケジュールは以下のとおりである。

1　初回オリエンテーション
2　愛着障害を抱える子どもの特徴
3　現場からの状況（愛着障害）
4　事例を使用した具体的な対応①
5　事例を使用した具体的な対応②
6　産学連携週
7　現場からの状況（発達障害）
8　療育の現場①
9　療育の現場②
10　実習先の発表、個人票作成
11　実習目標の作成
12　産学連携週
13　実習目標の完成、日誌記述指導
14　実習前～後の具体的な流れ説明
15　実習への具体的準備およびまとめ

全15回のうち２回は現場連携週とされ、日本児童

教育専門学校独自のプログラムである。保育所や施設など、実際に現場に足を運び見学する機会を設けている。第６週目はコロナ禍ということもあり、オンラインで保育所保育士による講義が行われた。第12週目は、学生が保育所へ足を運び、実際に見学した。前期にも現場連携週が設けられており、その際に文京区の複合型福祉施設の見学をしている。

実際の講義は２回の現場連携週を除くと13回になるが、学生にはノートをまとめたり調べ学習をしたりするための時間が、各回において別途１コマ設けられている。

また、種別ごとの施設の概要と実習内容は、１年生前期の「子どもの理解と援助」で取り扱っている。施設実習は宿泊を伴うなど心身と金銭面の負担が大きいため、早期から準備が必要である。入学直後から１年生の前期の「子どもと保育」内で、実習全般の心得や身だしなみなどを念入りに説明し、理解と準備を促している。よって、本授業では、子どもや利用者の特性（愛着障害や発達障害）とその対応法について事例を通して学ぶことと、個人票や実習課題の作成といった具体的な実習への準備作業をメインに取り組んだ。

全15回のうちの３分の１が対面授業で、残りはzoomを使用したオンライン授業であった。筆者が担当した学生は約75名で、社会人経験者が多いものの、大半はこれまで保育や育児経験のない学生であった。

４．実践の具体的内容②実習日誌の指導

日誌の指導においては、上記のスケジュールの通り、１回程度の時間しか割けていない。この理由の一つに、全６クラスにおいてクラスごとに学生の経験や能力に相当なばらつきがあり、日誌の記述指導を入念に行う必要がないクラスもあるからである。日誌の記述法に関して実施した指導法は以下の通りである。

- 毎時の授業ノートを添削して返却
- 学生の中でよく書けているノートをコピーし、見本として配布
- 種別ごとの日誌の見本を配布
- 見本の日誌の視写（授業内15分間）
- 療育のVTRを見ながら日誌に記述

上記の下線項目は全クラス共通しているが、その他の日誌に関する指導については各クラスの傾向に合わせた指導が各教員によって行われている。

５．実践の具体的内容③ノート作成の指導

授業ノートの作成法は、授業の初回に説明する。同時に、「施設実習までに磨いていきたい７つの力」（①聞く力②書く力③管理する力④質問する力⑤適応する力⑥持続する力⑦想像する力）の説明も行い、ノート作成はこれらの主に①②③を醸成するための一つとして採用された方法である。授業は実習を想定して板書（スライド）や解説プリントを最低限にし、教員による口頭での講義内容を聞き取り、メモしていくことを学生に求めた。

ノートの具体的な記入法の指示は以下の通りで、全クラス共通している。

- 左ページの上部に、授業回数、日付、タイトルを記す
- その下からは右端を５センチ程度空けて線を引き、その左側には授業内容、右側には気づいたことを随時記録していく
- 最後に、感想や考察、授業後に自ら調べたことを記す。

６．実践の具体的内容④ノートの添削

ノートの添削では、以下の点を意識して行った。

- 誤字脱字
- 読みやすい字で書かれているか
- 講義内容が過不足なく書かれているか
- 気付きが書かれているか
- 考察が書かれているか

感想しか書けない、もしくは感想と考察の区別できない学生には、考察とは感想から一歩踏み込んで、「なぜそう感じたのか、なぜそう思ったのか」を考えて言語化することだと学生に伝えている。

ノート提出の期間や方法に関しては、新型コロナウイルス感染拡大前は翌朝１限前に所定の場所へ提

出としていたが、オンライン授業が開始してからは１週間以内に teams 上での写真提出や対面時に提出する等、教員間で若干のばらつきがあった。

７．ノート採点のルーブリックの考案

上記の方法で学生が作成し提出した授業ノートを添削する際、前もって添削および採点基準を設け、明示したほうが学生教員双方にとってメリットがあると考えた。よって、ルーブリックを作成した。

① 提出期限の厳守（A．期限内　B．翌日以内　C．２日以上の遅れ）
② 整った体裁で書けているか（A．丁寧で読みやすい字、定規を使用　B．読みやすい字、定規を使用　C．字が薄い、読みにくい字、定規不使用）
③ 誤字脱字はないか（A．０個　B．２個以内　C．３個以上）
④ 講義内容が漏れなく聞き取れて書けているか（A．スライド＋教員の口頭説明　B．スライドのみ　C．不十分）
⑤ 講義内容に対してその都度、気づきが書けているか（A．３か所以上　B．１か所以上　C．０か所）
⑥ 感想と考察の違いを理解しており、これからの自分の行動に言及して書けているか（A．感想、印象に残ったことを一つ取り上げその考察を記述、これからの自分の行動に言及している　B．感想のみ記述　C．記述なし）
⑦ 疑問に思ったことをそのままにせず、調べられているか（A．調べたことをまとめている　B．具体的記述はないが「調べてみた」など感想考察欄で触れている　C．記述なし）

８．ルーブリックと実習日誌の共通項

以上のルーブリックは以下の表１のように、実際の日誌を書く上で重要な観点と照らし合わせることができる。日本児童教育専門学校の実習日誌は、まず時系列で一日の流れを記述し、その後に「本日の反省及び考察」欄があり、エピソードを交えた記述と振り返りについて記述する様式になっている。エピソードと反省、感想のそれぞれに別枠を設けている様式の日誌もあるが、記述する内容に大きな違いはない。

表１

ルーブリック	実習日誌
提出期限を守れているか	毎翌朝に提出する
整った体裁で書けているか	環境構成図も含めて整った体裁で書く
誤字脱字はないか	誤字脱字がない
講義内容が漏れなく聞き取れて書けているか	時系列で出来事を正確に記述する
講義内容に対してその都度、気づきが書けているか	実習生の気づきを記述する
感想と考察の違いが理解できたうえで分けて書けているか	エピソード、考察、反省を記述する
疑問に思ったことをそのままにせず、調べられているか	反省、翌日の目標

以上より、日誌記述で求められる「誤字脱字をしない」といった基礎的な文章力からエピソードの記述とそれに対する考察など、共通している点が認められた。上記の指導法が、日誌を書く上で重要な観点と共通点があることから、ノート作成の指導法は理にかなっていると言える。

ただし、日誌の中の「保育者の動き」や「実習生の動き」については毎回の授業においては記述できない内容である。第13回目では療育の VTR を視聴し、そこでの「保育者の子どもに対する関わり」と「自分が実習生としていると想定してのかかわり」を想像して記述する作業は試みた。それでも断片的な VTR から状況を読み取るには限界があるため、やはり実習で指導していただく意義がある。

９．さいごに

施設実習においても日誌の記述は重要事項でありながら、学生が負担に感じている事柄でもある。それにもかかわらず、施設実習指導では日誌の記述法を具体的に指導する時間や方法が十分でない状況も事実である。そのような状況を少しでも改善できるよう、日本児童教育専門学校で行われているノートの作成を活用した指導法を振り返り、新たに採点のルーブリックを提案した。

ルーブリックを提示しての指導およびその効果の検証はこれから行うため今後の課題としたい。ま

た、ノートの作成および添削指導が実際の日誌の記述評価と相関があるのか、そして12回のノート提出および添削で変化が見られた学生の分析も行いたい。

学生の文章力を向上させる試みは実習指導の授業に限ることなく、あらゆる授業で取り組んでこそ効果があると考える。よって、筆者の他の担当科目においても、ノート作成の指導法を取り入れたい。

10. 謝辞

本報告を執筆するにあたって、日本児童教育専門学校の施設実習指導教員である東郷結香先生、井上恵理先生、石﨑隆嗣先生にご協力いただきました。心より感謝申し上げます。

参考文献

赤瀬川修、友川礼（2015）「保育士養成校における施設実習指導の課題 ― 実習指導者が考える施設保育士に求められる資質に関するアンケート調査から ―」『松山東雲短期大学研究論集 45』pp. 11-19

稲田達也（2022）「施設実習における日誌の記述に関する文献レビュー」『豊岡短期大学論集』pp. 1-9

大塚美奈子・市東賢二・多田幸子（2022）「実習日誌における表記の誤りに対する指導プログラムの予備的検討 ― 自己修正方法の観点から」『学術研究所所報』pp. 95-106

小倉毅・土谷由美子（2009）「保育士養成課程における施設実習に関する課題 ― アンケート調査からの一考察」『中国学園紀要』pp. 77-87

河合高鋭・石山直樹編（2020）『保育士をめざす人のための施設実習ガイド』みらい

清道亜都子（2014）「保育実習日誌の記述における困難感の分析 ― 学生へのアンケート調査をもとにして ―」『三重短期大学生活科学研究会　紀要』pp. 25-31

駒井美智子編著（2018）『施設実習ガイド　保育者として成長するための事前事後学習』萌文書林

東郷結香（2019）「保育士養成課程における施設実習と福祉・心理科目の体系的まなび ― 教科目連携の発案 ―」『敬心・研究ジャーナル』第 3 巻第 2 号 pp. 51-58

久松尚美・佐々木昌代（2014）「施設実習における評価の“ズレ”の分析」『宮崎学園短期大学紀要』pp. 107-125

和田上貴昭・那須信樹・原孝成編著（2020）『ワークシートで学ぶ　施設実習』同文書院

付記

本報告は、2021年度学校法人敬心学園「敬心・研究プロジェクト」の助成を受けたものです。

受付日：2022年11月10日